

新・21世紀への道 <その4>

果樹農家としての担い手を目指して

茨城県水戸市・地域おこし協力隊としての就農研修は、最終3年目に入った（AAINews116号参照）。協力隊の活動内容は自治体の要請によって様々だが、私の場合、国の就農準備資金を活用した「就農型協力隊」に位置づけられ、地域での技術習得を通じて、農業担い手としての定住が期待されている。私の研修先である水戸観光果樹園芸組合は1972年に組織され、最多で23戸いた組合員は、現在10戸となり、高齢化により減少傾向にある。主に梨、ブドウ、リンゴが栽培され、樹体や施設は老朽化してきているが、一定の収穫を得る専業農家である。

私のように新たに果樹栽培をはじめするには、既存の果樹園を継承して、ある程度の収益を確保しながら、少しずつ果樹の更新を図ることが望ましい。ただ、就農のタイミングに合わせて、うまく継承できるとは限らない。農家の多くは身体の動く限りは続けたいと願っており、病害が多いなど条件の悪い園地から少しずつ手放す傾向にある。活動2年目には、病害が続いているブドウやナシの園地を継承前提で受託管理した。同時に、更地を借り受け、計6か所、約2ヘクタールの分散した農地を管理することとなった。



施設灌水や農薬散布に用いる水確保のため、借農地に井戸を掘削

周りの果樹農家からは「集約しないと管理できない」「最初から幾つもできるわけがない」などと、幾度も忠告があった。しかし、都合よく集約された園地が借りられるのを待つ余裕はなく、たとえ条件が悪くとも農地を借り、苗木を植えていかなければ、就農の見通しさえ立たない。実際に年間を通じて自分で管理することにより、技術の習得に加えて、果樹農家としての苦労ややりがいを感じ、先輩農家の心情に近づくことができたと感じた。

例えば、晩腐病のために数年収穫できていない巨峰ブドウ園では、技術習得が難しいとされる自然形整枝による有核（種あり）栽培が、30年近く行われてきた。園主からは、同じように栽培することを求められ、既存樹を切ることは反対された。早期にできる対策として、部分的に雨よけを設置し、有核と無核（種なし）の比較試験をした。どうにか収穫には至ったものの、雨よけのない露地部分、特に有核栽培の樹で病害が再発した。農薬散布よりも、雨よけによる予防効果が高く、無核栽培も導入できることを目にして、園主も少しずつ理解を示した。



簡易雨よけで実った巨峰ブドウ

一方、ナシ園では、「期待したようなタイミングで草刈りなどの管理がなされなかった」「継承するよりは更地にしたい」といった園主の意向があり、関係者で協議した結果、継承は困難と判断した。ただ、いきなり複数の農地での多品目栽培に無理があったことは否めず、3年目は、確実に管理できる3か所（約1ヘクタール）に絞り、更地への施設や定植など、まず自立基盤を整えることを優先する方針とした。

同じ地域でも、住民によって考え方は異なり、その地を守りながら生計を立ててきた農家は、特に保守的な傾向が強いようである。中には、親族以外に農地を貸すことに抵抗感、恥にも近い感情を抱く方もいる。先祖代々農地を守り、長年生業にしてきた自信やプライドを傷つせず、尊重しながら信頼を構築していくプロセスが必要だろう。地域との関わり方は多様化しており、果樹就農は一例に過ぎない。ただ、農地や果樹といった自然文化資産が絡むことで、担い手としての意識や覚悟のハードルが高くなると共に、地域の実情がより深く見えてきたと感じている。